

別紙（事後評価書）

平成 30 年度文化芸術振興費補助金（劇場・音楽堂等機能強化推進事業）

通し 番号	1	<p>事業分野：共同制作支援事業</p> <p>助成対象団体名：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）</p>
<p>助成対象活動に関する評価</p> <p>（妥当性）</p> <p>本公演は、幹事館として東京芸術劇場が経費の取りまとめ、出演者の交渉等を行い、オーバードホールがツアーの手配、熊本県立劇場が各種広報、宣伝を行うといった役割分担を行うことにより業務負担の軽減を図った。また、参加する3つの劇場の制作スタッフが立ち稽古以降参加し運営を行うとともに、舞台技術スタッフが全ての公演に参加するなど、明確な運営体制と役割分担により共同制作の意図を踏まえた活動を行っていたと認められる。</p> <p>キャストをオーディションで選出する、地域のオーケストラ、合唱を起用し、舞台・音響スタッフは各劇場の人材を活用するなど、地域の劇場の人材育成、地域文化の活性化に効果があると認められ、上演機会の少ない地域でこれらを行うことは助成に値する文化的、社会的意義等があったと評価できる。</p> <p>（有効性）</p> <p>各劇場が高いレベルでの公演を行うノウハウを共有し、今後も協力体制を築くことが出来る素地を醸成しており、目標・指標を概ね達成したと認められる。</p> <p>（効率性）</p> <p>事業はほぼ計画通り実施されており、事業期間は適切であったと認められる。また、当初の収支予算に対して収支決算では一部の費目に増減があったものの、助成対象経費はほぼ計画通り執行されており、事業費も適切であったと認められる。</p> <p>（創造性）</p> <p>総監督・指揮・井上道義が台本制作、日本語訳を行い、井上に指名された国際的に活躍するダンサー・振付師の森山開次が初めてオペラの演出・振付を行い、モーツァルトのオペラ作品を通して音楽と言葉と身体表現を一体化させオペラの可能性を切り拓こうとする挑戦であった。また、各劇場の職員による舞台技術スタッフを編成し現場の強化を図るなど、これまでの「全国共同制作プロジェクト」にはなかった新しい取り組みも見られた。</p> <p>調査した公演においては、井上が確固たる指揮でリードし、それに応えたオーケストラ（読売日本交響楽団）は、高い技術力と豊かな音楽性を発揮した優れた演奏でドラマを推進した。森山の演出・振付は、登場人物の心理や情景を巧みに描写したものであった。</p> <p>歌手陣は難しい日本語上演に苦戦したが、優れた成果を示した若手や中堅の歌手もおり、歌唱全体としては健闘したと認められる内容であった。</p> <p>舞台は「オーケストラピット」を囲む形で構成され、奥行きのある立体的な空間を作り、独特の世界を描き出すことに成功していた。</p> <p>異なる分野で活躍する2人の芸術家並びに3つの劇場の協働によって、高い芸術水準を概ね</p>		

別紙（事後評価書）

達成した公演であったと認められる。

来場者アンケートによる満足度において、富山公演は87%、東京公演は87%、熊本公演は100%という高い水準の結果を得ており、3公演の入場者・参加者数は目標を上回った。また、公演評においても概ね高い評価を得ており、ダンスとの融合を図りつつ、オペラ上演の新たな魅力と可能性を示した意欲的な公演として、3つの劇場の国内における評価の向上に一定程度つながったものと認められる。

（総 評）

当該共同制作「モーツァルト歌劇『ドン・ジョヴァンニ』（新演出）」は、妥当性、有効性、効率性、創造性において概ね適切であったと認められる。